

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑧

博物館にとって資料の補修も役割の一つである。資修の価値、今後の活用、補料の費用などを考慮し、資料を選定する。今回紹介する資料も傷みが激しく、そのまま展示できる状態ではなかった。そこで、専門業者に「裏打ち」を依頼した。資料の裏に和紙を張り、傷

石崎汽船大阪航路ポスター

最短コースとして人気を呼んだ。しかし、昭和に入ると松山駅の開業や昭和恐慌などで利用客は減少した。そこで、石崎汽船は貨船や観光船に力を入れ、34(昭和9)年8月には大阪航路(三津浜―今治―大阪)を開設した。その背景には、大阪商船の別府航路が今治に寄港していたが、天候により月に数回寄港できず、不便をきたしていた事情があった。大阪航路は不定期便だったが、相場の半額で運航し、今治からの乗客が多かった。

「海南新聞」に掲載され

資料補修で新たな発見

みが進むのを防ぐのであ。戦前の洋紙は和紙よりも劣化しやすく、補修の対象となりやすい。

本資料は、石崎汽船が第11相生丸で三津浜―大阪に往復便を出すポスターである。10月20日17時三津浜発、翌朝大阪着。22日18時大阪発、翌朝三津浜着。2日間、

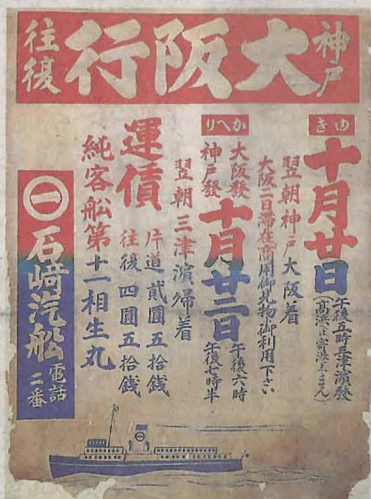
た。社史「海に生きる」によると、第11相生丸は1922(大正11)年に完成、尾道航路に就航した。速力13ノット(約24キ)、定員約300人、浴室、食堂を備えた豪華船であった。

尾道で国鉄に連絡する同航路は増便化・高速化が図られ、松山―大阪・東京の海運業者の意気込みがこもった資料と言える。

資料の補修は、単に良好な状態を維持して保存するだけではない。実は新たな調査と発見の機会でもあるのだ。

(専門学芸員・平井誠)

〈随時掲載します〉



石崎汽船の大阪航路ポスター。上半分が赤で、下半分が青の斬新なデザイン(1934年作成、県歴史文化博物館蔵)